

# 当事者が求めるものとは

## ——困りごとと周囲・自治体への期待

発達障害をもつ当事者として、日々の暮らしでどのようなことに困っているのか。そして、コミュニケーションや仕事をしていく上で、周囲に配慮してもらえると助かることは何か。



NPO法人  
DDAC（発達障害をもつ大人の会）代表  
広野 ゆい

### はじめに——大人の発達障害の現状

「大人の発達障害」がメディアに取り上げられることが増え、診断される人の数も増えていきます。私が主宰する発達障害のセルフヘルプグループ「関西ほっとサロン」は一五年ほど前、二〇〇二年に大人のADHD（注意欠如・多動性障害または注意欠如・多動症）のグループとして立ち上がりました。その後二〇〇五年に発達障害者支援法が施行され、大人発達障害の相談が急増したため二〇〇八年四月に発達障害をもつ大人の会を設立し、電話相談窓口を開設しました。するとその年にリーマンショックが起こり、そこから就労の問題が大きくなり、二〇一三〇〇代の仕事に悩む若者の相談が増えていきました。コミュニケーションが独特である、仕事を覚えるのが人より遅い、ミス

が多い、能力の凸凹が大きい、こういうひと昔前ならなんとかなっていたかもしれない発達凸凹の人が雇い止めやリストラにあったり、人員削減で増える仕事に対応できず、不適應を起したりして発達障害と診断されるようになったのです。この状況に対応するため、私たちはNPO法人格をとり、当事者による就労のサポート事業を行いました。二〇一〇年からは発達障害で障害者手帳をとって就労することができるようになりました。当事者は診断されてほっとした、という人が多いのですが、診断が出て手帳をとらない人も多く、また自分の特性に気づかず苦しんでいる人もまだたくさんいることを考えると、これは単なる障害者の問題ではないのではないかと感じています。発達障害者支援法ができるまで、発達障害は主に子どもの疾患として扱われ、大人の問題としては認識されていませんでしたと考えるのが自然です。

たと考えるのが自然です。

### 発達障害の困りごとと三つの特性

発達障害には大きくわけて三つの特性がありますが、重複していることも多く、一人ひとりの特性が違うため、診断名を聞いただけでは何に困っているのかわかりません。

まずADHD。これは私に最初についた診断名です。成人のADHDは三〜五％程度と言われています。症状は多動性・衝

た。私たちが自助グループを始めた一五年ほど前には診断してくる病院もほとんどなく、また相談窓口もありませんでした。それなら自分たちでサポートしあうしかないということで当事者のグループが全国にできました。私自身、ADHDという言葉を知ったのは二〇代後半になってからです。それまで幼少期から自分は周りの子と違うと感じていました。集団行動が苦手な周りに合わせられず、自分の持ち物も管理できませんでした。授業には集中できず、毎日忘れ物をして宿題もやっていない。小学校三年ぐらいで「忘れ物の女王」と言われました。何をすることもギリギリで朝も起きられず、高校のときには「遅刻の帝王」と呼ばれました。自分でもどうしてできないんだろとずっと悩んできましたが、なぜかわからないまま大人になり気がついたらもう自分は何もできないダメな人間だと思ってしまう。抑うつ状態になっていきました。大人になってから診断されている人も、子どもの頃問題がなかったわけではありません。問題は幼少期からあって、それに名前がつくようになって

### ひろのひい

一九七二年生まれ。子ども時代から、遅刻、片付けができない、周りに合わせられないなどの特性があり、忘れ物の女王、遅刻の帝王などと呼ばれながら学生時代を過ごす。専業主婦だった二八歳でうつ病、三二歳のときADHDと診断される。二〇〇二年に大人の発達障害のグループ「関西ほっとサロン」を立ち上げる。二〇〇八年四月に「発達障害をもつ大人の会」を立ち上げる。現在は発達障害当事者の立場でキャリアアカウンセリング、教師や専門職向けの講演、成人当事者向けの片付け・金銭管理セミナー等も行っている。キャリアアコンサルタント。二級FP技能士。

図1 ●発達障害をもつ大人の会の経緯

